愛と情熱の国、イタリア。
その南部に位置するアドリア海沿いの小さな港町。
そこは住人達の笑顔が絶えない、優しさと幸せに満ち溢れた温かい街であった。
この街を治めているのは五千もの部下を従えるマフィア・キャバッローネファミリー。
それを束ねしボスはハニーブロンドの髪と鳶色の瞳を持つ若干二十二歳の女性で、名をディーノといった。
彼女は争いを好まぬ温和な性格だが、大切な仲間や街の住人を守る為ならば容赦なく鞭を振るい、豊満な身体ながらもしなやかに戦うその姿はまさに『跳ね馬』。
加えて、穏やかな眼差しを浮かべ、艶のある薄桃色の唇に微笑みを湛える様はまるで地上に舞い降りた天使のようだとも噂されている。
慈愛と強さと美貌を兼ね備えた、完璧なる女ボス・ディーノ。
そんな彼女だが、実は右腕兼恋人のロマーリオしか知らない、ある堕落的な一面をも持ち合わせていた――

◆

「うっ、寒！」
屋敷の裏口から外へ出た途端に突き刺すような寒さに襲われ、ロマーリオは思わず両腕で自身を掻き抱いた。
時間も遅いし、何か羽織ってくればよかったか。
少し後悔するが、すぐそこだしちょっとの我慢だと気を取り直して、そのまま両の二の腕を摩りながら敷地の隅に建っている小さなガレージハウスへと足を踏み出した。

日もとっくに暮れ落ちたこんな時間に、しかも年の瀬の寒風吹きすさぶ中ロマーリオがガレージに向かう理由。
それは年明けて間もなくに開催される、ボンゴレ9代目主催の「ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦」にあった。
キャバッローネもその招待を受け参加が決まっているのだが、正月合戦のトリの種目「隠し芸」に